

教科書に記載される誤れる歴史

次に教科書問題に入ります。日本の教科書は、日本は侵略したのだ、悪かったのだという東京裁判史観で埋まっています。特に昭和五十七年、「文部省が侵略を進出に書換えさせた」という誤った報道を各新聞・テレビが

大々的に発表し、そのため中・韓国から干渉がありました。そして宮沢官房長官を中心に日本政府は、「今後教科書の検定に際しては近隣諸国の感情を配慮して、日本の教科書検定を行う」としたのです。つまり侵略問題や南京事件は検定なしにしたのです。従って昭和五十七年以後の教科書は、書く人が侵略と書けばそのまま侵略となります。南京で日本軍二十万人、いや三十万人虐殺したと書けばそのまま載ります。歯止めが外れてしまったのです。それまでは例えば南京事件では「攻防戦の混乱の中で」という記載があり、人数も具体的には示さず「多数の人が殺された、と言われている」といった記述でした。ところが昭和五十七年以降は近隣諸国に配慮するわけですから、「混乱の中で」は外されまして、「女子供を含めた八万人、二十万人が虐殺された」といった記載になっています。本当に東京裁判史観そのままです。「侵略」という言葉が一頁に五回も出てくるものさえあります。

しかし、イギリスやフランスの教科書はさすがに大人です。大東亜戦争、あちらでいう太平洋戦争を次のように解釈しています。イギリスの「世界近代史」という、一九八五年のロングマン社発行の教科書の第五章では、「二つの新興強国・アメリカと日本」と題しまして、「アメリカは独立以後急速に海外に進出し、米西戦争を起し、グアム、プエルトリコ、最後にはフィリピンを領有し、ハワイまで合併し、太平洋に大きな勢力を伸ばして来た。これに対して日本は、日清戦争・日露戦争に勝利して大きな力を蓄えた。この二大強国が対峙したから太平洋戦争が起こったのだ。」と教えています。さらにフランスの教科書は「フランス革命から今日の世界」と題する項目の中で、日本とアメリカとの対立について書いています。左の頁にはニューヨークの寒村が、そしてその下にはニューヨークの摩天楼を載せ、このようにアメリカは急速に進歩してきたのだと描き、右の日本の頁には、赤穂浪士の討ち入りの姿と、日露戦争の奉天入場の絵を載せ、日本もこのように発展して強国ロシアを倒したのだと描いています。この二つの勢力がぶち当たったのが大東亜戦争（太平洋戦争）であると教えているのです。

これが本当の歴史だと思えます。これを紹介した名越二荒之助先生もこれが大人の歴史だとおっしゃっていますが、その通りです。どちらが悪いとか、どちらが侵略したとか書いてありません。不敬なことに「昭和天皇に戦争責任がある」などと言う者もおりますが、戦争は両方に責任があるものなのです。日本だけが悪いとかアメ

リカは良かったとかいうものではないのです。

ソ連は中立条約を破って日本に攻め込み、満州や南樺太で婦女子を暴行し殺し、約七十万人の日本兵をシベリアに連行して、囚人同様に労働させて約六万人を死亡させました。しかしこのようなことは、日本の教科書には一行も書いてないのです。東京の爆撃だけでも十万人、しかも周囲に焼夷弾を落とす、アメリカは市民を殺したのです。これらの日本の被害は少しも書かないで、「日本が悪かった、侵略したのは日本だ、……」これが日本の教科書です。だから細川元首相ではないが、胸に手を当てたら思い当ることがあるというのは、そういう教育を受けて来たからです。細川氏は日本敗戦後の、日教組（日本教職員組合）の天下の時代に教育を受けたのです。日教組は革命を目指す教師の集団でありまして、日本の子弟を社会主義革命の戦士にすることが教育の本旨であると綱領に掲げて、日本の社会主義化に励んだのです。一時は教師の八十％をその日教組が占めていました。つまり誤った教育に東京裁判が覆いかぶさって、いわゆる東京裁判史観ができ、それに社会主義思想が重なった教育だったのです。細川氏や羽田氏らは皆同年輩、この犠牲になったむしろ不幸な方々なのです。もちろん土井たか子女史もそうです。当時、山花社会党前委員長が、土井たか子氏に「あなた衆議院議長になってくれ」と頼んだときに、土井さんは断りました。ところが山花氏が「来年は終戦五十周年です。国会で謝罪決議をします。貴方が謝罪使節団の団長として東南アジアを回って下さい」といったら喜んで衆議院議長になりました。先程から申し上げておりますが、侵略かそうでないかを決めるのは、その国の主権者であります。細川氏が侵略と言ひ、さらに国会決議などした結果は、それこそ取り返しがつかず、日本は末代までも国際犯罪人としての「前科者」の烙印を押されかねないことになっているのです。